

文章理解における「関係の予測」という概念の有効性

—日本語母語話者の予測の実態調査から—

石黒 圭

【キーワード】文章理解 予測 接続 連文 母語話者

1. 本研究の目的

文章を理解するときに予測をおこなっているということは、言語学の立場からも、心理学の立場からも、異論が出ることは少ないだろうと思われる¹。日本語学の分野では、林(1973)や寺村(1987)によって提唱された予測研究がさまざまな形で継承され、その成果が平田(1997)のなかで実証的にまとめられている。したがって、母語話者が予測をおこなっているということはすでに自明のこととなっており、今後は予測がどのようにおこなわれているのかというメカニズムを明らかにする方法に進んでいくことになる。

論者は、文を単位とする理解において予測がおこなわれているという主張を石黒(1996)でおこなって以来、文レベルでの予測のメカニズムを明らかにするという方向で研究を進めてきた(石黒 1998a, 1998b, 1999, 2001a, 2001b, 2004)。しかし、その一連の研究は論者の内省にもとづく研究であり、はたして一般性があるのかという面で疑問が残る。そこで、本稿では、論者が進めてきた研究の実証性を裏づけるために、早稲田大学第一文学部「日本語をみがく I B」を受講している 157 名の日本語母語話者の受講者²を対象に調査をおこなった。調査日は 2002 年 4 月 26 日、作業時間はおよそ 30 分である。

調査の方法は、文を単位としたたどり読みの方法に従った。すなわち、読み手にある一つの完成された文章を与え、それを冒頭から順に結末まで 1 文ずつ読み

¹ もちろん、まったく異論がないわけではない。海外の心理学の研究では、forward inference が on-line process のなかで生成されないという議論は存在する。しかし、予測をどうとらえるかという違いによってそうした食い違いが生じたと見ることも可能であり、また、全体としてみれば、そうした見方は少数派である。

² 当該授業は留学生も受講しているが、母語話者の予測の傾向を知るという目的のため、留学生は調査の対象から外した。また、この授業はオープン科目というカテゴリーであるため、早稲田大学第一文学部の学生のほか、20 名程度ではあるが、政経学部、法学部、第二文学部、教育学部、商学部、社会科学部、人間科学部や、学習院大学、学習院女子大学、日本女子大学、東京家政大学などの他学部、他大学の学生も含んでいる。

すすませ、そのさい、1文を読むごとに次の文の関係と内容を予測、記録させるというものである。また、その結果を整理するさいに、論者のこれまでの研究で用いてきた枠組みを適用し、その妥当性を検討した。まず、その枠組みについて簡単に説明しておく。

論者は、文を単位とした文章理解の予測では、当該文（今読んでいる文）と後続文（これから読む文）との連続性を問題にする「関係連続の予測」、接続関係を問題にする「接続関係の予測」、後続文の内容を問題にする「内容の予測」の三つに分けて考える。「内容の予測」は、笑いや恐怖を目的とするような特殊な文章をのぞき生成されることが少なく、たとえ生成されたとしても原文の後続文脈と一致することはほとんどないので、あまり理解の役に立たないと考えられる³。

一方、「関係連続の予測」と「接続関係の予測」（あわせて「関係の予測」と呼ぶことにする）は後続文脈の展開を限定するもので、これらの予測を読み手が生成した場合、その予測は原文の後続文脈と高い確率で一致する。

そこで、この「関係の予測」の下位類型（下記参照）を考え、それが数多くの読み手のあいだでどのくらい一致するのか、また、原文の後続文脈とどのくらい一致するのかを記述し、その下位類型の妥当性を考えることにしたい⁴。

【関係の予測の下位類型】

関係連続の予測

設定（話題や場面などを新たに設定する）

終了（それまでの話題や場面などをまとめる）

接続関係の予測

説明（当該文で不明瞭な部分が明らかにされることを予測する）

理由（当該文の事態や判断などが成立する理由や根拠を予測する）

順接（当該文から推論される結果や判断などを予測する）

逆接（当該文から常識的に推論される展開と逆の展開を予測する）

並立（当該文と類似の内容をもつものが並置されることを予測する）

2. 調査の具体的な方法

調査は以下のようなシートを配布しておこなった。また、後続文を見ることがないように、紙などで隠しながら作業を進めるように指示した。なお、紙幅の関係で省略したが、(1)の文のあとにつけた「関係：」「内容：」という欄を、(1)～(23)のすべての文のあとにつけてある。

³ 紙幅の都合で示すことはできないが、今回の調査では内容の予測は書かれないことが多く、書かれた場合でも、受講者と原文、受講者どうしの一致率はきわめて低かった。

⁴ 先ほど示した論者の一連の研究は、この下位類型の記述的研究として位置づけられる。

【配付シート】

問 以下の1文1文は、つなげていくと一つの文章になるものである。(1)から順に1文ずつ読みすすめて、その文の次に、その文と「どのような関係にある」「どのような内容の」文が原文に来るかを予測し、書きなさい。

(1) 大学で日本語の作文を教えている友人がいる。

関係：

内容：

(2) 課題を与えて文章をつづらせ、添削をするというごく普通のやり方だが、なかなかたいへんらしい。

(3) どういう課題を与えるかが重要で、工夫をこらす。

{改行} (4) 「恋人にあててラブレターを書きなさい」。

(5) だれでも思いつきそうなこの手は、まるでだめらしい。

(6) たいてい紋切り型のつまらない文章しか出てこない。

(7) そこで考えたのが「得意料理のつくり方」だった。

{改行} (8) これはいい。

(9) 過不足なくわかりやすい文章を書けるかどうか、よく試される。

(10) 欠点もはっきり見える。

(11) そのなかにこんなのがあったそうだ。

(12) 「マグロのネギステーキ」という魅力的な一品だったが「まずマグロを四等分に切る」とあった。

{改行} (13) あのマグロをねえ。

(14) せめてサバだったら四等分できるかもしれないが、マグロとなるとノコギリを用意しなければならないだろう。

(15) 学生は巨大なマグロを見たことがないのか、あるいはマグロのサクのことしか頭になかったのか。

{改行} (16) 振り返ってみると、確かに普通の学校教育で実用的な文章を書く訓練をほとんど受けてこなかった。

(17) いまはどうか知らないが、昔の作文の授業といえば「感じたことをそのまま書きなさい」だった。

(18) しかし感じたことを言葉にするのはいかにたいへんか。

{改行} (19) 友人は、ほかに「始末書」の書き方も教えたそうだ。

(20) これは、あまり習熟するのめどうかと思うが。

(21) それよりマニュアルといわれる操作の手引の書き方を教えたらどうだろうか。

(22) あの日本語を解説するのはいつも一苦労だ。

(23) こちらの習熟は会社で重宝されるだろう。

(2001年12月17日『朝日新聞』朝刊「天声人語」)

「天声人語」を用いたのは、内容が平易で、長さが短く、調査に使いやすいことにくわえ、これまで文章論の研究にもっともよく使われてきた素材であるため、先行研究と比較、検討しやすいからである。また、当該授業は文章表現の授業であり、受講生が関心を持って読めそうなテーマを、と考へ、本資料を選択した。

3. 調査の結果

ここでは、関係の予測の調査結果のみを示すことにする。内容の予測は、受講者によって千差万別で、類型化が不可能だったからである。一般に、内容の予測は、先行文脈が強い意味的な制約を備えている場合にかぎって成立する。

受講生の示した関係の予測は、種類が多く、一見多岐にわたるように見えるが、実際には似たような内容を違う用語で表していることが多い。そこで、受講生が示した関係の予測のうちまず似た名前を持つものをグルーピングし、さらにそのグルーピングしたものなかで性格が似ていると考えられるものをまとめるという2段階の手続きを踏んだ。そのようにして受講生の関係の予測をまとめた結果、以下ようになった。なお、関係がとくに書かれておらず、空欄だったものは「なし」として処理をした。

【グルーピングの対応関係】

関係連続の予測

【設定】：導入、提示

【終了】：転換、回帰、終結

接続関係の予測

【説明】：説明、補足、詳細、内容、具体化、例など

【理由】：理由、根拠

【順接】：「原因—結果」的…順接、結果、展開、接続、反応

「根拠—判断」的…考へ、疑問、推測、評価、結論、提起

【逆接】：逆接、対比、譲歩

【並立】：並列、付加、継起

【調査結果概要】

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)
設定	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1
終了	3	0	0	0	3	26	2	0	3	5	0	2
説明	96	29	111	79	19	21	41	33	36	56	143	41
理由	6	87	19	4	88	8	32	89	26	18	0	4
順接	40	11	14	46	32	80	71	33	50	53	12	85
逆接	3	27	6	20	9	20	9	0	8	9	0	20
並立	7	3	7	5	4	0	0	2	32	16	0	3
なし	1	0	0	2	1	2	2	0	2	0	1	1

	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	(21)	(22)	(23)	合計
設定	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
終了	0	8	4	0	0	7	0	15	2	1	11	92
説明	39	35	24	37	30	43	34	22	28	28	8	1033
理由	17	16	5	14	4	26	19	15	71	21	31	620
順接	85	78	108	78	64	63	92	43	47	85	82	1352
逆接	7	11	4	17	50	3	6	55	8	8	11	311
並立	8	9	11	10	7	11	6	6	1	10	6	164
なし	1	0	1	1	2	4	0	1	0	4	8	34

以下、一つ一つの文について見ていく。

- (1) 大学で日本語の作文を教えている友人がいる。(説明⁵)

【説明】(96)⁶: 説明⁷(54)、詳細(14)、補足(10)、具体化(4)、内容(3)、例(1)、その他(10)

【順接】(40): 順接(22)、展開(10)、接続(3)、結果(2)、提起(2)、推測(1)

【並立】(7): 付加(7) 【理由】(6): 理由(6) 【設定】(1): 導入(1)

【終了】(3): 転換(3) 【逆接】(3): 逆接(3) 【なし】(1): 内容あり⁸(1)

この調査結果を見るかぎり、説明の予測が目立っている。内容を見ると、説明の予測にも2通りある。「友人が大学で作文をどのように教えているか」という予測と、「大学で日本語の作文を教えている友人がどのような人物であるか」という予測である。原文の後続文と一致するのは前者であるが、実際に予測が多かったのは後者であった。当該文が「友人が作文を教えている」という動作述語ではなく、「作文を教えている友人がいる」という存在述語だからであると考えられる。

- (2) 課題を与えて文章をつづらせ、添削をするというごく普通のやり方だが、なかなかたいへんらしい。(理由)

【理由】(87): 理由(87)

【説明】(29): 説明(11)、補足(3)、詳細(2)、内容(3)、具体化(2)、例(7)、その他(1)

【逆接】(27): 逆接(27)

【順接】(11): 順接(5)、結果(1)、発展(2)、評価(2)、接続(1) 【並立】(3): 付加(3)

⁵ 原文の直後の()で、原文における当該文と後続文の関係を表す。

⁶ 接続関係の後にある()のなかの数字は人数を表している。

⁷ コロンより右のデータは受講生のデータをサブカテゴリとしてまとめたものである。

⁸ 「内容あり」は関係の予測は空欄であったが、内容の予測には何か書かれていた(つまり何らかの予測が立っていた)ことを、「内容なし」は内容の予測も空欄であった(つまり予測がまったく立たなかった)ことを表す。

受講者の予測は「理由」が圧倒的に多い。どうして「たいへん」なのか、その理由が次に来ることを予測するのである。そうした予測の背景には、当該文の述部がナ形容詞「たいへんだ」+モダリティ形式「らしい」であることがある。「たいへんらしい」という書き手の判断を表す文末が理由の予測を呼びこむのである。

(3) どういう課題を与えるかが重要で、工夫をこらす。(説明)

【説明】(111): 例(70)、説明(20)、具体化(7)、補足(2)、詳細(4)、内容(3)、その他(5)
【理由】(19): 理由(19) 【順接】(14): 順接(9)、結果(2)、展開(1)、結論(1)、提起(1)
【並立】(7): 付加(5)、並列(2) 【逆接】(6): 逆接(6)

ここでは説明の予測が群を抜いて多い。「どういう課題」の不定語「どういう」が効いている。「どういう課題を与えるかが重要で、工夫をこらす」のだから、その工夫を凝らした課題の例が次に予測されるのである。

{改行} (4) 「恋人にあててラブレターを書きなさい」(順接)

【説明】(79): 説明(49)、例(11)、補足(9)、詳細(1)、その他(9)
【順接】(46): 結果(22)、順接(6)、反応(5)、考え(4)、評価(4)、展開(2)、疑問(2)、接続(1) 【逆接】(20): 逆接(19)、譲歩(1) 【並立】(5): 並列(3)、付加(2)
【理由】(4): 理由(4) 【なし】(2): 内容あり(2) 【設定】(1): 提示(1)

原文では、「恋人にあててラブレターを書きなさい」という課題にたいする評価が示されており、順接の予測と考えられる。しかし、受講者の予測は説明に偏っている。「恋人にあててラブレターを書きなさい」という課題が付帯説明もなく投げ出されているので、その課題を「それは」で受け、その説明をすると考えた受講者が多かったためである。しかし、原文の後続文でも、「恋人にあててラブレターを書きなさい」を「だれでも思いつきそうなこの手は」と承けており、その点では違いはない。その後が説明になるか、「だめらしい」という評価になるかの違いだけである。その意味で、説明の予測をした受講者の予測はあながち原文とかげ離れているわけではないように思われる。

(5) だれでも思いつきそうなこの手は、まるでだめらしい。(理由)

【理由】(88): 理由(88) 【順接】(32): 結果(7)、展開(7)、順接(5)、疑問(5)、考え(3)、推測(2)、評価(2)、提起(1)
【説明】(19): 例(9)、説明(6)、補足(2)、内容(1)、その他(1)
【逆接】(9): 逆接(6)、対比(3) 【並立】(4): 並列(2)、付加(2)
【終了】(3): 転換(3) 【設定】(1): 提示(1) 【なし】(1): 内容あり(1)

ここでは理由の予測が突出している。これは、(2)と同様、「だめだ」というナ形容詞と「らしい」というムード形式が述部で重なることによって、当該文が書き手の判断を表した文であるというニュアンスが強く出、その判断の根拠が必要

となってくるためである。だれでも思いつきそうな課題であれば、うまくいきそうなものなのに、現実にはうまくいかないという逆接的なニュアンスも理由の予測に拍車をかけている。

一方、そのわりには理由の予測が多くないと見ることもできるが、それは「ラブレターを書きなさい」などという課題が、携帯・メール世代の昨今の大学生に通用するわけがないという意識が受講者のあいだにあったためかもしれない。当然だという意識があれば、「なぜ」を問おうという姿勢がなくなり、次の展開を予測する方向に傾くのであろう。

(6) たいてい紋切り型つまらない文章しか出てこない。(順接)

【順接】(80)：順接(19)、提起(19)、展開(15)、推測(7)、考え(6)、結果(5)、疑問(5)、結論(3)、評価(1) 【終了】(26)：転換(26)

【説明】(21)：例(13)、説明(3)、補足(1)、具体化(1)、その他(3)

【逆接】(20)：逆接(16)、対比(4) 【理由】(8)：理由(8) 【なし】(2)：内容あり(2)

ここでは、順接の予測が高い支持を集めている。その内訳を見てみると、狭義の「順接」が19名、「提起」が19名、「展開」が15名と続いている。狭義の「順接」や「展開」を考えた読み手は、次の文の文頭にある接続語「そこで」に象徴されるような予測を想定したと考えられる。一方、「提起」というと、2通りの解釈の可能性があるように思われる。一つはどうすればいいかという疑問そのものを示す「問題提起」、もう一つは解決策を示す「提案」であり、5名いる「疑問」は前者に、7名の「推測」や6名の「考え」などは後者に、それぞれつながっていると考えられる。

また、2番目に多い「終了」の予測に見られる「転換」も、内容の予測を見たかぎりでは、文章論の研究者が「さて」「ところで」のイメージで考える「話題の転換」とは異なり、「じゃあ、どうすればいいの」という「方向転換」を示していると思われ、実際には、順接に連続する部分もある。

(7) そこで考えたのが「得意料理の作り方」だった。(順接)

【順接】(71)：結果(36)、順接(14)、評価(7)、展開(5)、推測(3)、接続(2)、反応(2)、考え(2) 【説明】(41)：説明(24)、補足(4)、具体化(4)、詳細(3)、その他(6)

【理由】(32)：理由(32) 【逆接】(9)：逆接(8)、対比(1)

【終了】(2)：転換(2) 【なし】(2)：内容あり(2)

この当該文でもっとも多かったのが順接の予測である。「ラブレターを書きなさい」という課題がだめで、「そこで考えたのが「得意料理の作り方」だった」のだから、この「得意料理の作り方」という課題を課した結果を知りたいと読み手が考えるのはごく自然な流れであると思われる。原文では「これはいい」という評価の形で展開している。

また、順接の予測の次に説明の予測が多かったのは、当該文が「～の…だ」という分裂文の形を取っているからである。この文が分裂文であるから、その焦点は「…だ」の部分、すなわち、「得意料理の作り方」の部分であり、その成分の説明を読み手が予測することもまた、ごく自然な流れであると思われる。

3番目に理由の予測が多いのも、やはり当該文が分裂文であるということによる。分裂文というのは「…だ」の部分を選んでくるという意識の強い表現であり、ラブレターの書き方でも履歴書の書き方でもない「得意料理の作り方」をなぜ選んでくるのかという、選んだ動機を予測させるのである。この理由の予測は(8)をかいして(9)や(10)で結実することになる。

{改行} (8)これはいい。(理由)

【理由】(89)：理由(89)

【説明】(33)：説明(17)、具体化(5)、詳細(4)、例(2)、内容(1)、その他(4)

【順接】(33)：順接(17)、結果(6)、展開(2)、推測(2)、評価(2)、接続(1)、反応(1)、疑問(1)、提起(1) 【並立】(2)：付加(2)

ここでは、理由の予測が突出している。すでに見た(2)や(5)と同様に、書き手の評価を表す形容詞が述部に来た場合、その書き手の評価を支える根拠を後続文に予測するからである。

(9) 過不足なくわかりやすい文章を書けるかどうか、よく試される。(並立)

【順接】(50)：順接(21)、結果(12)、結論(4)、展開(3)、接続(2)、推測(2)、提起(2)、反応(1)、評価(1)、考え(1)、疑問(1)

【説明】(36)：例(16)、説明(7)、補足(6)、詳細(3)、内容(1)、その他(3)

【並立】(32)：付加(27)、並列(5) 【理由】(26)：理由(26)

【逆接】(8)：逆接(6)、対比(2) 【終了】(3)：転換(3) 【なし】(2)：内容あり(2)

この当該文の予測はかなりばらけているし、現実には予測が難しい文であると思われる。まず、もっとも多かった順接の予測であるが、(7)「得意料理の作り方」は、(8)「いい」課題で、(9)「過不足なくわかりやすい文章を書けるかどうか、よく試される」から、実際に学生に書かせたという流れになる。

次に多い説明の予測は、内訳として「例」がもっとも多いことからわかるように、実際にやらせてみた内容を詳しく説明するものである。この予測は直後の(10)では当たらないが、(11)以降で結実する。

3番目に多い並立の予測は、原文のとおり予測である。「よく試される」という文末の未完結感に物足りなさを感じた読み手が似たような内容をつけ加えるもので、そのことは27名の受講者が「付加」という接続関係の予測を考えたことからもうかがわれる。

4番目の理由の予測は、「得意料理の作り方」を書くことがなぜ「過不足なく

わかりやすい文章を書けるかどうか」につながるのか、そのつながりの不明確さを問うたものであろう。

(10) 欠点もはっきり見える。(説明)

【説明】(56)：例(41)、説明(8)、補足(2)、具体化(2)、詳細(1)、その他(2)

【順接】(53)：順接(17)、結論(14)、結果(10)、展開(4)、接続(2)、疑問(2)、提起(2)、推測(1)、評価(1)

【理由】(18)：理由(18) 【並立】(16)：付加(9)、並列(6)、継起(1)

【逆接】(9)：逆接(9) 【終了】(5)：転換(5)

(9)と(10)の予測は似た傾向にある。それは当然で、(9)と(10)は並列の関係にあり、内容が類似した文であるため、予測の方向性がほとんど変わらないからである。しかし、そのなかでも、説明の予測が増え、並立の予測が減っているのが目立つ。つまり、2文、似た内容の文を重ねたことによって、文末の未完結感が薄れたぶん、新しい展開を求めていく方向に予測が変わっていったのだろう。

(11) そのなかにこんなのがあったそうだ。(説明)

【説明】(143)：例(89)、説明(24)、内容(11)、具体化(8)、詳細(5)、その他(4)

【順接】(12)：順接(5)、提起(3)、推測(2)、接続(1)、疑問(1)

【設定】(1)：導入(1) 【なし】(1)：内容なし(1)

この当該文が説明の予測を引き起こすということは衆目の一致するところであり、数字もそのことをはっきりと物語っている。「こんな」は、先行文脈に「こんな」に相当するないようが見あたらない以上、後方照応であることを示唆しており、読み手は「こんな」の説明を後続文に求めていくことになる。この種の予測はまず外れることがない。

(12) 「マグロのネグステーキ」という魅力的な一品だったが「まずマグロを四等分に切る」とあった。(順接)

【順接】(85)：評価(35)、疑問(15)、順接(9)、考え(7)、展開(6)、接続(4)、提起(4)、反応(2)、結果(1)

【説明】(41)：説明(25)、例(8)、補足(3)、詳細(1)、具体化(1)、その他(3)

【逆接】(20)：逆接(20) 【理由】(4)：理由(4) 【並立】(3)：並列(2)、付加(1)

【終了】(2)：転換(2) 【設定】(1)：導入(1) 【なし】(1)：内容あり(1)

この当該文は、勘のいい読み手であれば、関係の予測だけでなく、内容の予測も可能などころである。つまり「マグロを四等分に切る」という表現の不自然さに気がつくことができるかどうかというところがポイントになってくる。

予測としては、まず順接の予測が目立つ。そのなかでも35名を占める「評価」は「マグロを四等分に切る」という表現はおかしいことを指摘し、また、15名の

「疑問」は「マグロを四等分に切る」ことが本当にできるのかという疑いを呈する。次に多い説明の予測では「マグロを四等分に切る」ことは不可能なことを説明し、20名いる逆接の予測も、「しかし、実際にマグロを四等分に切ることは不可能だ」と続けていく。接続関係の予測こそ異なるが、いずれも、「マグロを四等分に切る」という表現の不自然さを指摘する予測であるという点では一致する。

{改行} (13) あのマグロをねえ。(順接)

【順接】(85): 評価(27)、順接(17)、疑問(11)、考え(10)、接続(7)、推測(5)、展開(3)、提起(2)、結果(1)、反応(1)、結論(1)

【説明】(39): 説明(21)、補足(7)、詳細(4)、具体化(2)、その他(5)

【理由】(17): 理由(17) 【並立】(8): 付加(7)、並列(1)

【逆接】(7): 逆接(7) 【なし】(1): 内容あり(1)

グラフを見てもわかるように、(12)と傾向の差がほとんど見られない。やはり、「マグロを四等分に切る」というのはおかしいという評価や説明を予測する読み手が依然として多く見られ、実際、原文もそのように進んでいく。

(14) せめてサバだったら四等分できるかもしれないが、マグロとなるとノコギリを用意しなければならないだろう。(順接)

【順接】(78): 評価(23)、順接(16)、疑問(13)、推測(6)、結果(4)、展開(4)、提起(4)、接続(3)、結論(3)、考え(2)

【説明】(35): 説明(20)、補足(6)、例(2)、詳細(1)、具体化(1)、その他(5)

【理由】(16): 理由(15) 【逆接】(11): 逆接(10)、譲歩(1)

【並立】(9): 付加(7)、並列(2) 【終了】(8): 転換(8)

多少ゆるやかになったとはいえ、この文においても、(12)、(13)の傾向が維持されている。「マグロを四等分に切る」という表現にたいする書き手の違和感の表明が終わっていないと、読み手は考えているのであろう。

しかし、そうはいつても、(13)では現れなかった終了の予測を8名の受講者が考えているということも頭に入れておく必要がある。当然のことながら、「あのマグロをねえ」にくらべて、「マグロとなるとノコギリを用意しなければならないだろう」という「だろう」で終わる文末のほうが完結感が高く、そこで書き手の主張にいったん区切りが付き、文章が新たな方向へと展開していくという感じが、多少なりとも高まっているのだらうと思われる。

(15) 学生は巨大なマグロを見たことがないのか、あるいはマグロのサクのことしか頭になかったのか。(終了)

【順接】(108): 推測(22)、結論(22)、考え(17)、評価(14)、順接(13)、展開(7)、結果(4)、接続(4)、疑問(3)、提起(2) 【説明】(24): 説明(11)、補足(6)、例(4)、その他(3)

【並立】(11)：付加(7)、並列(4) 【理由】(5)：理由(5)

【終了】(4)：転換(4) 【逆接】(4)：逆接(4) 【なし】(1)：内容あり(1)

ここへ至っても、(12)～(14)の傾向に変化は見られない。それどころか、(14)で見られた緩やかさが後退し、順接の予測が突出することでむしろその傾向に拍車がかかったような感さえある。

そのような傾向を作り出したのは、「あるいは」という接続語であろう。かりに「学生は巨大なマグロを見たことがないのだろうか」のように、一つの判断を示して文が終わっていけば、これほど順接の予測だけが際だつこともなく、新たな話題への転換を予測する読み手は増えていたはずである。「あるいは」で結ばれている書き手の判断の候補が二つあることで、書き手の主張についての未完結感が生じ、いずれにしても「マグロを四等分に切る」という表現はおかしい、とまとめる必要があると感じられるようになったものと思われる。しかし、原文は未完結感を残しながらも、新しい話題に踏みだしている。

【改行】(16) 振り返ってみると、確かに普通の学校教育で実用的な文章を書く訓練をほとんど受けてこなかった。(説明)

【順接】(78)：順接(28)、結果(17)、考え(8)、推測(6)、評価(5)、展開(4)、疑問(4)、提起(4)、接続(2)

【説明】(37)：説明(12)、例(8)、補足(4)、具体化(4)、詳細(3)、内容(3)、その他(3)

【逆接】(17)：逆接(17) 【理由】(14)：理由(14)

【並立】(10)：付加(6)、並列(4) 【なし】(1)：内容あり(1)

新たな話題が始まる(16)であるが、ここからの予測は難しい。まず、もっとも多い順接の予測は「文章を書く訓練をほとんど受けてこなかった」結果を予測するものである。「マグロを四等分に切る」という表現から推察される、先行文脈で指摘された学生の文章力のなさを念頭に置いて当該文を理解すれば、「普通の学校教育で実用的な文章を書く訓練をほとんど受けてこなかった」結果、学生が文章をうまく書けないのは当然で仕方のないことであるという予測が想定される。

次に多い説明の予測は、この文が備えている一般性を具体化するものである。「普通の学校教育で実用的な文章を書く訓練をほとんど受けてこなかった」ことを「振り返って」いるのだから、書き手の過去の実体験が具体的に語られることを予測することもまた自然であり、原文もそのように展開している。

(17) いまはどうか知らないが、昔の作文の授業といえは「感じたことをそのまま書きなさい」だった。(逆接)

【順接】(64)：評価(16)、結果(14)、順接(13)、考え(9)、提起(5)、展開(2)、接続(2)、疑問(2)、反応(1) 【逆接】(50)：逆接(44)、対比(6)

【説明】(30)：説明(17)、補足(2)、詳細(1)、内容(1)、その他(9)

【並立】(7)：付加(5)、並列(2) 【理由】(4)：理由(4) 【なし】(2)：内容あり(2)

ここでは順接の予測と逆接の予測が拮抗するという一見奇妙な事態が起こっている。確かに一般的には順接と逆接は対立するものであるが、この文脈では順接と逆接はむしろ協力しあっていると見ることができる。

まず、順接の予測であるが、この文脈では、「感じたことをそのまま書きなさい」という作文教育がおこなわれた結果、実用的な文章が書けない現状が生じているという予測が成り立つだろう。また、内訳のなかでもっとも多い評価の予測では、「感じたことをそのまま書きなさい」という作文教育では、実用的な文章が書けるようにならないという問題点の指摘がなされることになる。

一方、逆接の予測であるが、「感じたことをそのまま書きなさい」という作文教育がおこなわれてきた。しかし、それでは実用的な文章が書けるようにはならない、というやはり問題点を指摘するような逆接になるだろう。当該文の「感じたことをそのまま書きなさい」で文章がうまく書けるのであれば、この「天声人語」は書かれる必要はない。しかし、それでは文章がうまく書けないから、書き手の友人が大学の作文の授業で苦勞をしているのである。

このように、悪い結果を招くことがわかっているとき、順接と逆接の予測が並びたつことがありうる。

(18) しかし感じたことを言葉にするのはいかにたいへんか。(終了)

【順接】(63)：順接(24)、考え(8)、展開(7)、結果(5)、接続(4)、疑問(4)、評価(4)、結論(3)、推測(2)、反応(1)、提起(1)

【説明】(43)：説明(15)、例(11)、詳細(4)、具体化(3)、補足(2)、内容(2)、その他(6)

【理由】(26)：理由(26) 【並立】(11)：付加(9)、並列(2)

【終了】(7)：転換(4)、回帰(3) 【なし】(4)：内容あり(4)

【逆接】(3)：逆接(2)、対比(1)

ここでは順接の予測が多く、それに説明の予測が続いている。

順接の予測は、「感じたことを言葉にするの」が「たいへん」なので、書き手の友人の作文教育のような、「感じたことをそのまま書きなさい」に代わる新たな作文教育の必要性を予測することになる。

説明の予測は「感じたことを言葉にする」ことの「たいへんさ」を説明するものであり、「たいへんだ」というナ形容詞による書き手の評価を根拠づける理由の予測につながっていくものである。

{改行} (19) 友人は、ほかに「始末書の書き方」も教えたそうだ。(順接)

【順接】(92)：評価(36)、順接(16)、結果(14)、考え(11)、展開(4)、接続(3)、反応(3)、疑問(2)、推測(2)、結論(1)

【説明】(34)：説明(22)、例(6)、補足(1)、詳細(1)、具体化(1)、その他(3)

【理由】(19)：理由(19) 【逆接】(6)：逆接(6) 【並立】(6)：付加(6)

ここでは、順接の予測が目立つ。とくに、「始末書の書き方」という新しい課題にたいする書き手の評価を予測するのが多いのは納得がいく。「始末書の書き方」といういささか刺激的な課題は評価の対象になりやすいからである。同様に、「始末書の書き方」にたいする結果の予測が多いことも理解できる。やらせてみた結果、どういう名答、珍答が生まれたかを期待したくなるからである。

他に説明の予測が若干多めだが、これは「始末書の書き方」という慣れない作業なので、その作業手順を具体的に説明してほしいという読み手の気持ちの表れであると考えられる。

(20) これは、あまり習熟するのめどうかと思うが。(逆接)

【逆接】(55)：逆接(54)、対比(1)

【順接】(43)：評価(13)、順接(7)、結論(6)、提起(4)、結果(3)、接続(3)、考え(3)、展開(2)、反応(1)、疑問(1)

【説明】(22)：例(10)、説明(7)、補足(2)、具体化(1)、その他(2)

【終了】(15)：転換(13)、回帰(2) 【理由】(15)：理由(15)

【並立】(6)：付加(6) 【なし】(1)：内容あり(1)

ここで逆接の予測が多いのは、「思うが」という文の終わり方が予測に影響を与えているものと思われる。接続助詞「が」で言います文は一般に先行文にたいして補足的に働くことが多い。しかし、この文の場合、文末の接続助詞「が」は補足的ではなく、むしろ当該文に含みを与えるものとして働いている。したがって、「あまり習熟するのめどうかと思うが」、それでも書かせてみる意味があるなどのように、接続助詞「が」が後続文にも影響を及ぼしていると考えた読み手が多いことをこの結果は示している。

次に多い順接は、始末書の書き方が問題である以上、それにたいする方策や代案を提示するというような予測が多い。

(21) それよりマニュアルといわれる操作の手引の書き方を教えたらどうだろうか。(理由)

【理由】(71)：理由(71) 【順接】(47)：順接(16)、考え(7)、推測(6)、結果(5)、評価(4)、提起(3)、展開(2)、接続(2)、疑問(1)、結論(1)

【説明】(28)：説明(24)、補足(3)、例(1) 【逆接】(8)：逆接(8)

【終了】(2)：転換(2) 【並立】(1)：付加(1)

この文では、理由の予測を考えた受講者が半数近くを占め、それに、順接の予測が続いている。

ここで書き手は、「始末書の書き方」ではなく「マニュアルといわれる操作の手引の書き方」を教えることを提案している。AよりもBを選ぶというのには、選

んだ動機を必要とすることが多いのである。事実、原文では、後続文でマニュアルの書き方を提案した理由が述べられることになる。

一方、理由の予測の次に多い順接の予測は、そうすれば、文章技術が上達する、身につけても役に立つといった効用が期待できるということを予測するもので、この予測は最後の(23)の文で結実する。

(22) あの日本語を解説するのはいつも一苦労だ。(順接)

【順接】(85)：順接(24)、考え(17)、評価(14)、疑問(6)、結論(6)、推測(5)、結果(4)、展開(4)、接続(3)、提起(2)

【説明】(28)：説明(14)、補足(5)、例(4)、詳細(1)、内容(1)、その他(3)

【理由】(21)：理由(21) 【並立】(10)：付加(6)、並列(4)

【逆接】(8)：逆接(8) 【なし】(4)：内容あり(4) 【終了】(1)：転換(1)

この文では順接の予測が目立ち、説明、理由がそれに続いている。

始末書の書き方かわりに、マニュアルの書き方を教えてみたらどうかという先行文での提案、マニュアルの日本語を解説するのにいつも苦労するという当該文の内容を合わせて考えると、そこから、書かせてみたらきっと役に立つという考えや、だから実際に書かせてみようという結果を予測しようとするのは自然な流れである。

また、説明の予測や理由の予測では、「のは」を使った構文によって焦点が当たっている「一苦労」の内実や「一苦労」の原因を具体的に予測するものであり、展開を予測する順接の予測とは異なり、当該文を深める予測になっている。

(23) こちらの習熟は会社で重宝されるだろう。(終了)

【順接】(82)：結論(40)、順接(11)、考え(10)、評価(8)、結果(5)、推測(3)、接続(2)、提起(2)、疑問(1) 【理由】(31)：理由(31) 【終了】(11)：終結(6)、転換(5)

【逆接】(11)：逆接(10)、対比(1) 【説明】(8)：例(4)、説明(2)、補足(2)

【なし】(8)：内容なし(6)、内容あり(2) 【並立】(6)：並列(3)、付加(3)

原文はここで終わっており、次には文がない。しかし、終わりの文を終わりの文として予測できるかどうかということを調べるために、受講者には最後の文についても予測をおこなってもらっている。

ここで注目したいのは、順接の予測をした64名のうち40名までがそれを結論の予測と考えている点である。また、終了の予測をしたものが11名、内容の予測も含めて予測を書かなかった受講者も6名いる。合わせると3分の1以上の読み手が何らかの形でこの文を終わり、または終わりに近い文であると認識していたことになる。

それ以外の予測は平均的である。そのなかでも比較的多い理由の予測は、話し手の判断を表す文末「だろう」の力によって、「重宝される」と考えたその根拠を

予測しているものと思われる。

4. まとめ

以上、(1)～(23)まで、関係の予測について1文1文見てきたが、全体をとおしてわかることは、大きく分けると以下の三つである。

- i) 読み手が関係の予測に使う用語はある程度共通している。
- ii) 読み手の予測は原文とある程度一致する。
- iii) 原文と一致しない予測でも、読み手どうしの予測の一致率は高い。

まず、i)「読み手が関係の予測に使う用語はある程度共通している」という点から見ていきたい。受講者は、その背景から、おそらく国語や英語の教科文法用語を駆使して関係の予測を表現しているものと思われる。もちろん、そこには個性があり、用語にも相当の広がりが見られる。しかし、重要なことは無数ある用語のなかから自由に選んでいるはずなのに、そのわりに一致度が高いということである。それは受講者間の一致にとどまらず、論者の感覚とも一致している。

もちろん、説明、理由、順接、逆接、並立など、どの用語を取ってみても、専門家のあいだですら、定義にズレが見られるものばかりであり、用語の吟味ということをおこなったことがない受講者のあいだでは、そのズレはさらに広がるのが予想される。しかし、そうであっても、受講者が関係の予測を求められたとき、そうした用語を使って当該文と後続文の関係を捉えられるという事実が重要であるように思われるのである。

また、受講者の個性による用語の広がりについても、詳しく見ていくと、それほど無秩序に広がっているわけではない。たとえば(1)に見られた用語で、論者が「説明」としてくくったものの中には、「説明」「具体的な説明」「内容説明」「詳細」「詳述」「細かい説明」「詳しい説明」「補足」「補足説明」「具体」「具体化」「具体的な説明」「内容」「内容説明」「具体例」「紹介」「承」「修飾」などがあつた。ここには相当な広がりが見られる。しかし、そこに捉えられている関係のイメージはさほど違いはないのではなからうか。「当該文の内容を、詳しく(細かく/具体的に/補足的に)説明(紹介)する」と考えれば「説明」という一つの関係のイメージのなかにくることができる。「承⁹⁾」「修飾」という一見まったく異なるように見える用語であっても、当該文を承ける内容が後続文に来る、当該文を修飾する内容が後続文に来る、と考えれば、この「説明」という関係のカテゴリに入れられそうである。

分類というものは、連続的なものどうしのあいだに線を引かなければならない

⁹⁾「承」という用語は「起承転結」を意識しているものと思われる。

作業であり、人によってその線の引き方に違いは出てくるだろうが、以上のように見てくると、関係連続の予測を「設定」と「終了」の二つに、接続関係の予測を「説明」「理由」「順接」「逆接」「並立」の五つに分けることにはそれなりの妥当性がありそうである。

つぎに、ii)「読み手の予測は原文とある程度一致する」という点について述べたい。以下の表を見ればわかるように、関係の予測の一致率は全体としてみると、43.2%である。これを多いと見るか、少ないと見るかは判断の分かれるところであろう。ただ、はっきりしていることは、(11)のように一致率のいちじるしく高いものと、(15)、(18)、(23)のように一致率のいちじるしく低いものがあるということである。

とくに一致率の低いもの三つがいずれも、原文においては「終了」の関係にあったことが目を引く。つまり、この「天声人語」の文章がまとめの文をきちんと述べて次の展開に移るというスタイルではなく、まとめの文を象徴的に述べて余韻を残しつつ次の展開に移るというスタイルを取っているために予測が当たらないのである。むしろ、ここで予測が当たってしまったのは、「天声人語」の書き手があえて言いきらないことによって、読み手に考えさせる余地を残した表現効果が失せてしまうことになる。

予測が当たらずに文章が次に展開していった場合、読み手はその予測が当たらなかった部分を自らの想像力で埋めなければならない。しかし、その予測が当たらなかったということが読み手の想像力を喚起し、理解を深めることにつながる場合もある。つまり、予測は当たらないことにも意味がある場合もあるのである。なお、予測の一致率の低い(15)、(18)、(23)のこれら三つを除けば、48.9%と、一致率はさらに高まることになる。

論者がこれまでパイロット的におこなったいくつかの調査でも、今回おこなった調査でも、関係の予測の一致率はだいたい40%台に落ちつく傾向がある。この数字が何を意味しているか、今後の研究で明らかにしていかなければならないが、現時点で予測が外れる理由として考えられそうなことは3点ほどある。1点めは、複数の予測が成り立つ可能性がある場合である。複数の予測が成り立つ場合、いずれかの予測を選ばなければならないため、その結果として予測が外れることがあるということである。2点めは、すべての文に接続語がつかないのと同様に、すべての文について予測が成り立つわけではないのではないかということである。接続語は、文脈の分岐点にさしかかったときにつく傾向がある。同様に、予測も、文脈の分岐点にさしかかったときに強く意識されるものであって、それ以外の場合はあまり意識されないし、また意識しにくいものなのではないかということも考えなければならない。3点めは、さきほど述べたように、書き手が読み手の予測を外すことで、文脈に変化を持たせたり、ある種の表現効果を生み出したりする場合があるということである。このように考えてくると、「読み手の予測は原文

とある程度一致する」の「ある程度」にも意味があるように思われる。

さらに、iii)「原文と一致しない予測でも、読み手どうしの予測の一致率は高い」ということについても、一言触れておきたい。読み手が文章を読むときに、けっして気まぐれに読んでいるわけではないということは、読み手どうしの一致率が原文との一致率よりもさらに高い52.5%を占めるということからわかる。この数値は、過半数の読み手がつねに同じような予測をしながら読んでいるということの意味している。

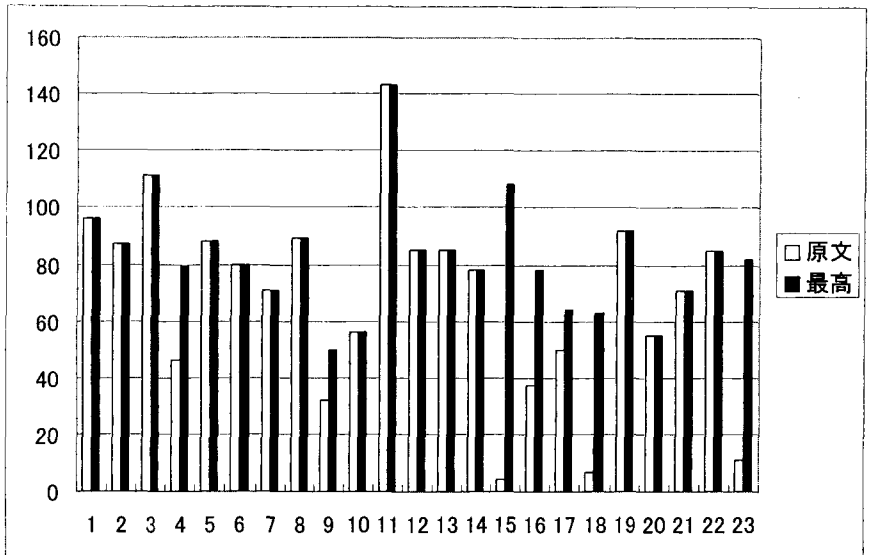
以上のことから、関係連続の予測を「設定」と「終了」の二つに、接続関係の予測を「説明」「理由」「順接」「逆接」「並立」の五つに分けて考えると、母語話者の学生の関係の予測はある程度重なりあい、その予測は、原文でも、母語話者の学生どうしても、それなりに高い一致率を示していることがわかる。

本稿は、文を単位とした文章理解において「関係の予測」という概念を立てることが有効かどうかを議論したものである。今回の調査結果を見るかぎり、「関係の予測」を七つの下位類型に分けることがそれなりに有効であることを示しており、「関係の予測」という概念が文章理解に効いている可能性が高いと判断することができる。

表およびグラフ：受講者の予測と原文、および受講者どうしの予測の一致数・一致率（「原文」は、受講者の予測と原文の一致数。「最高」は、関係の予測における受講者どうしのもっとも高い一致数。全数は157(名)×23(文)=3611)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)
原文	96	87	111	46	88	80	71	89	32	56	143	85
%	61.1	55.4	70.7	29.3	56.1	50.9	45.2	56.7	20.4	35.7	91.1	54.1
最高	96	87	111	79	88	80	71	89	50	56	143	85
%	61.1	55.4	70.7	50.3	56.1	50.9	45.2	56.7	31.8	35.7	91.1	54.1

	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	(21)	(22)	(23)	合計
原文	85	78	4	37	50	7	92	55	71	85	11	1559
%	54.1	49.7	2.5	23.6	31.8	4.5	58.6	35.0	45.2	54.1	7.0	43.2
最高	85	78	108	78	64	63	92	55	71	85	82	1896
%	54.1	49.7	68.8	49.7	40.8	40.1	58.6	35.0	45.2	54.1	52.2	52.5



参考文献

- 石黒圭(1996)「予測の読み 一連文論への一試論」『表現研究』64
- (1998a)「理由の予測 一予測の読みの一側面」『日本語教育』96
- (1998b)「逆接の予測 一予測の読みの一側面」『早稲田日本語研究』6
- (1999)「並立の予測 一予測の読みの一側面」『国語学研究と資料』23 国語学 研究と資料の会 (早稲田大学)
- (2001a)「句の説明の予測 一予測の読みの一側面」『一橋論叢』126-3 一橋大学一橋学会
- (2001b)「格成分の説明の予測 一予測の読みの一側面」『一橋大学留学生センター紀要』4
- (2004)「順接の予測 一予測の読みの一側面」『一橋論叢』132-3 一橋大学一橋学会
- 寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』6-3
- 林四郎(1973)『文の姿勢の研究』明治図書
- 平田悦朗 (研究代表者) (1997)『日本語学習者の文の予測能力に関する研究及び読解力・聴解力向上のための教材開発』平成8年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 研究成果報告書 (課題番号 06451159)

(いしぐろ けい／一橋大学助教授)